

北九州市立  
文学館  
Kitakyushu  
Literature Museum

○「ちよい不安館長」の独白	1	○北九州の児童文芸誌「小さい旗」	5
○第二回特別企画展	2	○五十年のあゆみ展	
○「作家の自筆原稿でたどる〈文学・青春〉展」		○対談「自分史を語ろう」	6
○高樹のぶ子さん講演会「文学と青春」	2	○佐木館長のたのしい文章教室	7
○企画展「ズッコケ三人組ワールド	4	○クイズラリー「めざせ!文学館博士」	7
○ハチベエ・ハカセ・モーちゃんがやってきた!」		○資料寄贈・寄託者	8
○お話し会「ズッコケ先生、那須正幹さんと話そう」	4	○予告:古川薫さん講演会	8
○「ズッコケ三人組」作品朗読劇	5	○高橋陸郎さん講演会	8
○角野栄子さん講演会	5	○みんなおいでよポエムの国へ	8
○ポップ・サム&伊藤比呂美ストーリーテリング	5	○文学館文庫の出版	8

# 「ちよい不安館長」の独白

館長 佐木隆三

二十七歳のとき八幡製鉄所を辞めて、いわゆる筆一本の生活だったから、勤務先というものはありませんでした。それがどうしたのか六十九歳で市立文学館館長を仰せつかり、週に三日を目安に「出勤」しております。

門司区の山小屋で暮らし、早起きして畑仕事をして、一風呂浴びて徒歩で山を下り、JR門司港駅から西小倉駅まで行き、少し歩いて文学館に着き、受付係に「きょうは何人くらい?」と、まず来館者数を聞くのです。

そうして、数字が良ければ目の前が明るくなり、良くなければ落ち着きませぬ。そのような日常ですから、「どうすれば文学館に足を運んでもらえるのか」と、考えないわけにはいきません。

急いで断っておけば、作家というものは「どうすれば本を買ってもらえるか」と、悩んだりしないものです。書かずにはいられないから書いて、それが読者に受け入れられなかったら、あきらめるしかない。読者

に媚びるようになったら、自ら作家生命を絶つようなものです。しかし、文学館は公共の施設であり、皆さまの税金でまかなわれています。そうであれば、「立派なものをつくったんだぞ」と、ふんぞりかえってなどいられない。機会あるごとに文学館の宣伝をして、来ていただく努力をしなければなりません。

ビッグネームの講師の集客力に頼ることも必要ですが、やはり地味な努力の積み重ねが大切でしょう。そう思っって夏に催したのが、「たのしい文章教室」と、

「自分史を語ろう」でした。子どもさんの文章は発想が豊かで伸び伸びとして、「この中からきつと作家が誕生する」と、わたしは確信しました。また、ポン菓子機を完成させた吉村利子さん、口演童話で全国を行脚した本村義雄さんのお話を聞き、自分史のヒントを得た人もいたようです。

子どもさんの文章は発想が豊かで伸び伸びとして、「この中からきつと作家が誕生する」と、わたしは確信しました。また、ポン菓子機を完成させた吉村利子さん、口演童話で全国を行脚した本村義雄さんのお話を聞き、自分史のヒントを得た人もいたようです。

## たのしい文章教室



子どもさんの文章は発想が豊かで伸び伸びとして、「この中からきつと作家が誕生する」と、わたしは確信しました。また、ポン菓子機を完成させた吉村利子さん、口演童話で全国を行脚した本村義雄さんのお話を聞き、自分史のヒントを得た人もいたようです。

## 第三回特別企画展 「森鷗外展」

北九州は、明治から大正、昭和、そして現在に至るまで、幅広い分野で多くの文学者を輩出しています。その端緒を担った森鷗外は、明治三十二年、陸軍第十二師団軍医部長として小倉に着任、離任するまでの二年十月、勤務の傍ら、地域の教育者や文化人と積極的に交わり北九州に文化の種を蒔きました。

北九州の文化振興に大きな足跡を残した森鷗外を、今回あらためて顕彰し、広く紹介します。



小倉赴任前日

### 小倉日記

明治三十二年十月一日、陸軍第十二師団軍医部長として小倉に着任。小倉は、北九州の文化の中心地として、多くの文学者を輩出した。その端緒を担った森鷗外は、明治三十二年、陸軍第十二師団軍医部長として小倉に着任、離任するまでの二年十月、勤務の傍ら、地域の教育者や文化人と積極的に交わり北九州に文化の種を蒔きました。

(ともに文京区立本郷図書館鷗外記念室所蔵)

\*開催期間 10月5日(金)～11月4日(日) ※月曜日休館 (月曜日が祝日の場合は開館、翌日休館)  
\*観覧料 一般四〇〇円、中学生二〇〇円、小学生一〇〇円